

一、滑稽俳句とは ～滑稽の起源～

河村正浩

滑稽の始まりは「俳諧の連歌」だが、「俳」も「諧」も共に「おどけ」「戯れ」を意味している。ということは「俳諧即ち滑稽」ということになる。

和歌、連歌は貴族、武士階級によって支えられてきた。しかし、室町時代の末期には町人層を中心とした庶民階級の勢いが盛んになった。そのために権力への反発や権威を揶揄した価値の転換が試みられ、世相を笑いの材料にする大衆の眼が台頭した。その結果、連歌の中に滑稽を強調し、大衆の鑑賞に供するよう一般化したのが俳諧であった。つまり、当時の俳諧には滑稽という要素が不可欠であった。

俳諧は当時、当然の成り行きとして貞門・談林派へと引き継がれた。そうした人情を^{くすくす} 擦る笑いの世界を人生観賞の滑稽としての俳諧に引き上げたのが芭蕉であった。「俳諧の益は俗語を正す也」と。俳諧を俳諧たらしめ、和歌や連歌と分かつ根本的な要素は、俳言（俗語を使うこと）を用いるということであった。貞門・談林派ではおかしみを表す手段として俳言を用いたのに対し、芭蕉は新しい詩心を盛るため、欠くべからざるものとして俳言を用いた。

その一例、

蚤虱馬の尿する枕元

芭蕉

「俳句の本質は滑稽、揶揄、即興」と言ったのは山本健吉だが、この提言は決して俳句を軽く扱ったのではない。あくまで高度の滑稽であって、俳句に限らず文学全般にも関わるものである。

そして、もう一つ忘れてならないのは井本農一の「俳句イロニー説」である。「イロニー」とは、アイロニー（皮肉、反語、逆説的など）のことで、俳句の本質は「イローニッシュな対象の把握」にあるとし、芭蕉は滑稽が内面化された「一種のイローニッシュな対象把握の方法を成立」させていると言う。さらに、井本

は、正岡子規の写生が虚子の花鳥諷詠へ移行したのは、俳句的美意識の後退であるとの批判もしている。

一方、俳句と同じく「俳諧の連歌」に起源をもつ川柳についてもふれておきたい。川柳は、古くは前句付けと言ひ、七七の前句に五七五を付ける形（付句）であった。その後、付句が前句から切り離されて独立したのが現在の川柳である。俳句は連歌の発句が独立し、川柳は付句が独立したもので、それぞれ性格は対照的である。

俳句は季語や切字を用いるが、川柳はそれに拘らず、句の終止も言い切りにしないで〈役人の子はにぎにぎをよくおぼえ〉のように連用形止めにすることが多い。俳句が詩的な自然美などを追求するのに対し、川柳の多くはユーモアやペースを交えながら世相や人事を鋭く風刺するという特徴をもつ。

現在の俳句にも川柳にも、本来の滑稽が失われているが、滑稽には高度のエスプリから微妙な人情の機微、更に卑俗的な揶揄から猥褻な描写と、その幅は広い。ともすれば人の心はどうしても滑稽を単なる笑いの世界に持ち込んでしまいがちになるから、滑稽の定義については、短絡的にならぬよう、くれぐれも気を付けねばなるまい。